



地域の商店街。歴史的町並みを保存する意義について考えました

に心えようとし、それが教員に対する信頼につながり、生徒も教員も高め合える学びの場になると考えています。

2 地域に生きる人材の育成

今年度の授業開きでは、校区である射水市小杉地区の宝について書かれた新聞のコラムを取り上げました。導入で「校区の宝は何だろう」と問いかけると多くの生徒は「何もない」と答え、なかなか校区の宝が出てきませんでした。さらに生徒は、都会のように魅力的な娯楽施設のない地元について、「つまらない地域」と話していました。

しかし、地域の活性化に向けて活動する人や歴史や文化の保存に取り組み、客観的な数値を示す統計資料等を挙げることで、これまで見えていなかった地域のよさと出会う授業では、生徒は驚き、地域に対する見方や考え方を変化させてきました。実際に授業後の感想では、「小杉は意外と発展している地域だということを知り、驚きました。」や「普段見ている景観を当たり前だと思っていたけど、他の地域にはないものと知ったので大切に守っていききたいです。」という声が、聞かれるようになってきました。

社会科の教員として、生徒にはふるさとに誇りを持ち、一人ひとりが地域の将来を担う人材に育ってほしいと考えます。このような面からも地域教材を開発し、ますます授業で取り上げていかなければいけません。

3 生徒とともに見つめる地域

昨年度から希望者を募り、夏休みに「私たちの身のまわりの環境地図作品展」に挑戦しています。これは、環境地図教育研究会が毎年、北海道旭川市で開催している全国規模の地図展であり、私の担当する学年では、日頃の地域学習の発展として、生徒が自らテーマを決めて調査を

行い、地図にまとめています。例えば、少子高齢化に興味を持った生徒は、中学校区の保育園・幼稚園と老人ホームの歴史や現状をまとめたり、農地の減少に関心のある生徒は、家の周りの水田の減少について主題図を作成したりしています。

この活動を通して、生徒自身が地域をより深く学ぶことができるだけでなく、私も地域への新たな視点を得ることができています。

身近な地域を礎として、これからの社会を担う人材の育成を目指し、授業力向上に向けて日々努力し続ける教員でありたいと思っています。



授業での意見交換の様子。ペア学習やグループ活動だけでなく、自由に立ち歩いて、意見の聞き合いをすることも多いです

学校教育の現場から



早川 晃央 AKIO HAYAKAWA



射水市立小杉中学校 教諭 社会科
1990年 富山県富山市生まれ
2013年 明治大学文学部史学地理学科地理学専攻卒業
2013年 射水市立小杉南中学校教諭
2016年 現職

私が本格的に教職を志したのは、大学3年の「教職特論」の授業でした。齋藤孝先生のゼミ形式の授業で、実際に中学校に向いて授業をさせてほしいという思いが、最高の仲間と教育について語り合っていたりする中で、教員になりたいという思いは日に日に強くなっていきました。

大きな夢をもって明治大学文学部地理学専攻を卒業し、教壇に立って早4年目になります。今年度は初めての異動を経験しました。学年4クラスだった初任校から7クラスの大規模校となり、多くの生徒に囲まれて共に学び合う喜びを実感する半年でした。

1 「歩く・観る・考える」

教員としての私を支えているのは、地理学専攻のモットー「歩く・観る・考える」です。どの先生も授業の中でたびたび口



球技大会の様子。ともに汗を流し、生徒との距離を縮めます

にされています。私は授業づくりをする中で、社会科の授業には、この「歩く・観る・考える」とがもつとも必要ではないかと思っています。

射水市の社会科教員は長年、地域教材の開発に努めており、特に今年度は、生徒が実感をもって学習に取り組むことができる地域教材を積極的に授業で取り上げるようにしています。

社会科の授業では、資料が必要不可欠です。資料を集めるために、インターネットや文献にあたることはもちろんですが、地域教材を開発するためには、市役所や必要な機関に問い合わせたり、地域住民の声を直接聞きに行ったりすることもあります。従来の「つめこみ型」授業では得られない、生徒が興味をもって資料にあたり考え、実感を伴って理解を深めていると感じています。また、教員の隠れた努力が見えたとき、生徒はそれ

地域を見つめる授業のあり方について